

入学前教育に対する学生自身の意識

——筑波大学 AC 入試合格者の場合——

島田 康行, 白川 友紀, 渡邊 公夫, 山根 一秀 (筑波大学)

筑波大学アドミッションセンター(以下 AC と略称)では、本学 AC 入試合格者を対象とする意識調査を平成 12 年度から継続的に実施している。本稿は、平成 14 年度合格者を対象とする第 3 回調査の結果を報告するものである。

この調査は、第 1 回調査から継続する調査項目と、今回、新たに付け加えた調査項目からなる。新規の調査項目とは、「入学前教育」の必要性に関する意識を問うたものであり、本稿ではこの調査項目に対する回答結果の分析を試みる。また、継続する調査項目の回答結果についても、第 1・2 回(平成 12・13 年度)の調査結果と比較しつつ概要を述べる。

なお、本学 AC 入試の概要については、島田(2001, 2002a)などを参照されたい。

1. 調査の概要

1.1 手順

第 3 回調査の対象、実施時期、回収率は以下のとおり。

対象：平成 14 年度 AC 入試入学者 92 名
(第 I 期：87 名, 第 II 期：5 名)

時期：平成 14 年 9 月配布, 9~10 月回収
回収率：68.5% (63 名)

回答は無記名とした。また、所属する教育組織を任意で答える形式とし、63 名中 61 名がこれに答えた。3 学期制の本学では、9 月は夏休み明けに当たる。第 I 期(4 月入学)の学生は 1 学期間の学生生活を送った状態で、第 II 期(8 月入学)の学生は入学直後の状態で、答えていることになる。

1.2 内容

第 3 回調査の主要な部分は、第 1 回調査から継続する質問項目(Q1~Q5)と、新規の質問項目(Q6, Q7)からなる。

Q1~Q5 は「AC 入試の受験対策」に関する質問である。各問の内容は次のとおり。

- Q1 AC 入試出願にあたって、クラス担任・クラブ顧問などの指導者から、なんらかの指導を受けたか。(yes/no 選択)
- Q2 その指導は具体的にはどのようなものであったか。(選択肢から選択、複数回答可)
- Q3 その指導は AC 入試受験の役に立ったか。(yes/no 選択、理由等を付記)
- Q4 AC 入試では、どのような点が重要な評価のポイントだと考えたか。(選択肢から選択、複数回答可)
- Q5 自分のどのような点が最も評価されたと感じたか。(自由記述)

以下は新規の質問項目で、「入学前教育」の必要性などについて尋ねるものである。

- Q6 合格後、入学までどのような学習をしていたか。(自由記述)
- Q7 合格後、入学までに、大学から課題を出して学習させるべきだと思うか。(yes/no 選択、理由等を付記)

2. 調査の結果

2.1 AC入試の受験対策について

まず、継続する質問項目(Q1~Q5)に

対する回答結果について、第1・2回(平成12・13年度)の結果と比較しつつ、順に概要を述べる。

[Q1] 出願時に指導者の指導を受けたか

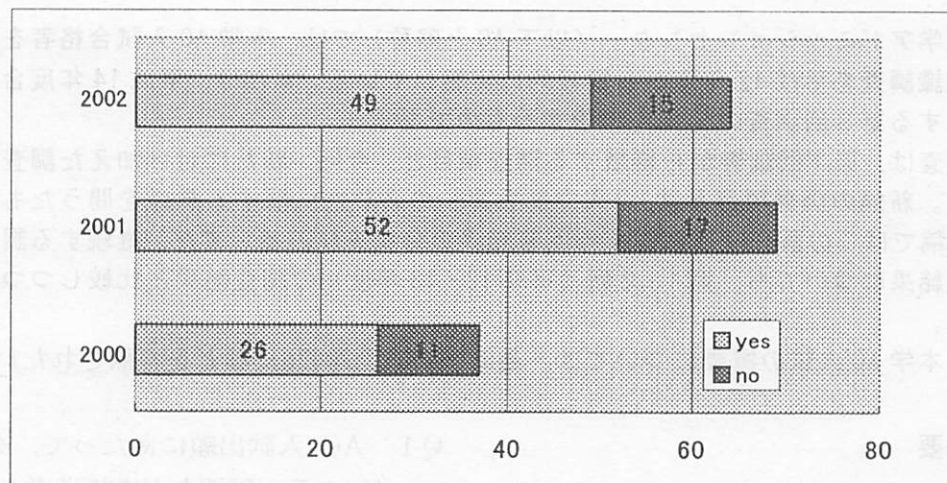


図1 出願に際して指導を受けた学生の割合

本学のAC入試は自己推薦型であるが、多くの志願者が、何らかの指導を受けて出願する(図1)。その割合は、当初から非常に高い(平成12年度:70.2%, 13年度:75.4%, 14年度:77.8%)。初年度はAC入試に関する情報がごく少ない中での受験であったはずであるが、すでに70%を超えていた。また、この調査では、回答者がいわゆる現役の高校生であったか既卒者であったかを確認できないが、現役の高校生に限れば指導を受けて出願する率はさらに上がるものと予想される。ただ、「一人でやることに意義を感じた」といった声も毎年聞かれるところである。

[Q2] どのような指導を受けたか

本学のAC入試は、志願者の継続的な活動や研究などにおける主体的な問題の発見と解決の過程を最も重視して選抜を行うものである。したがって、志願者の自己推薦内容が、実は、

指導者によって企画された活動であったり、その中での問題解決が主体的なものでなかったり、そもそも本人のものでなかったりすると重大な問題である。

回答結果をまとめて図2(次頁)に示す。

提出書類に関しては、志願理由書(800字)と自己推薦書(形式・枚数自由)の推敲が指導の中心となっている。自己推薦書を重視する傾向が高まっているのは、この入試に関する情報が行き届きつつあることを示すものと思われる。一方、懸念されるような、自己推薦内容の企画・実施支援を受けたと回答した者も、毎回わずかながらある。

面接に関しても、自分の自己推薦内容に関連する想定問答を行ってくる者の比率が増加する傾向にある。それはこの入試の受験対策として、的はずれではない。

面接の練習は「本番でも落ち着いて言いたいことが言えた」「自分の考えがまとまった」などの理由で、受験の「役に立った」と感じ

る者が多いようである ([Q3])。

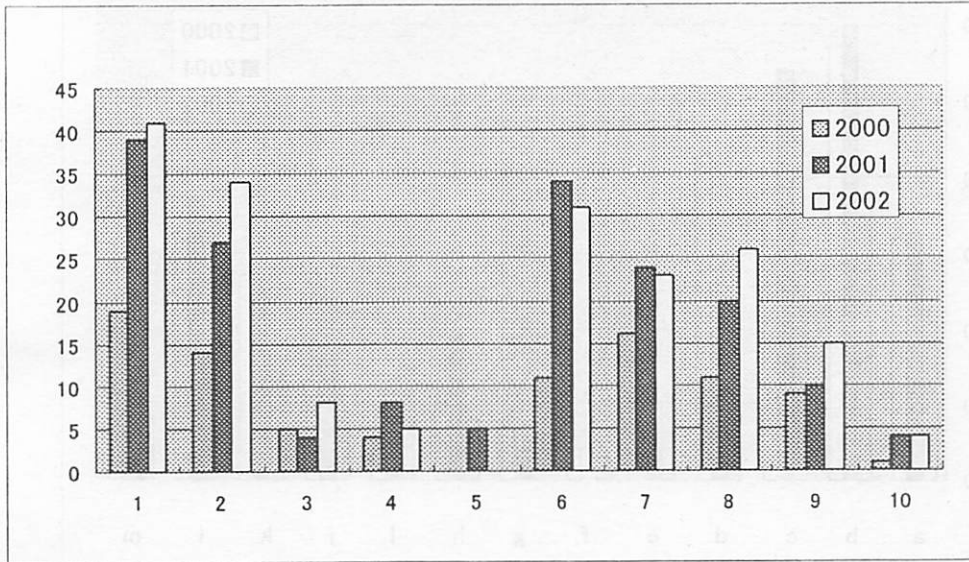


図2 受けた指導の具体的内容

(選肢)

提出書類に関して

- 1 : 志願理由書の推敲
- 2 : 自己推薦書の推敲
- 3 : 自己推薦書の企画, 構成
- 4 : 自己推薦内容の企画, 実施支援
- 5 : その他

面接に関して

- 6 : 心構えなど, 一般的注意
- 7 : 模擬面接 (志望動機など)
- 8 : 模擬面接 (自己推薦内容など)
- 9 : 模擬面接 (挨拶, 自己紹介など)
- 10 : その他

[Q4]

どのような点が重要な評価のポイントだと考えたか

次の a ~ m から選択して回答する形式で尋ねている (複数回答可)。

- a 人物 b 意欲 c 興味・関心
- d 学力/問題解決力 e 生徒会活動
- f ボランティア活動 g 運動部での活動
- h 文化・芸術・学術的活動
- i 資格・技能・検定 j 文章表現力
- k 口頭表現力 l 独創性
- m その他

選肢のうち「d 学力/問題解決力」は、

前回までの調査では「学力」と表記していたが、その指す内容が偏差値的な学力に偏って受け取られる場合が多いと判断し、今回の調査では「問題解決力」に変更した。

結果を図3 (次頁) に示す。

意欲, 興味・関心, 問題解決力に回答が集中している点は, 合格者がこの入試の趣旨をよく理解していることを示している。独創性と答える者が多いのも継続して見られる特徴である。なお, 第1・2回調査で「学力」の回答数がわずかだったのは, やはりその内容を問題解決力と結びつけて考えた者が少なかったことによると考えられる。

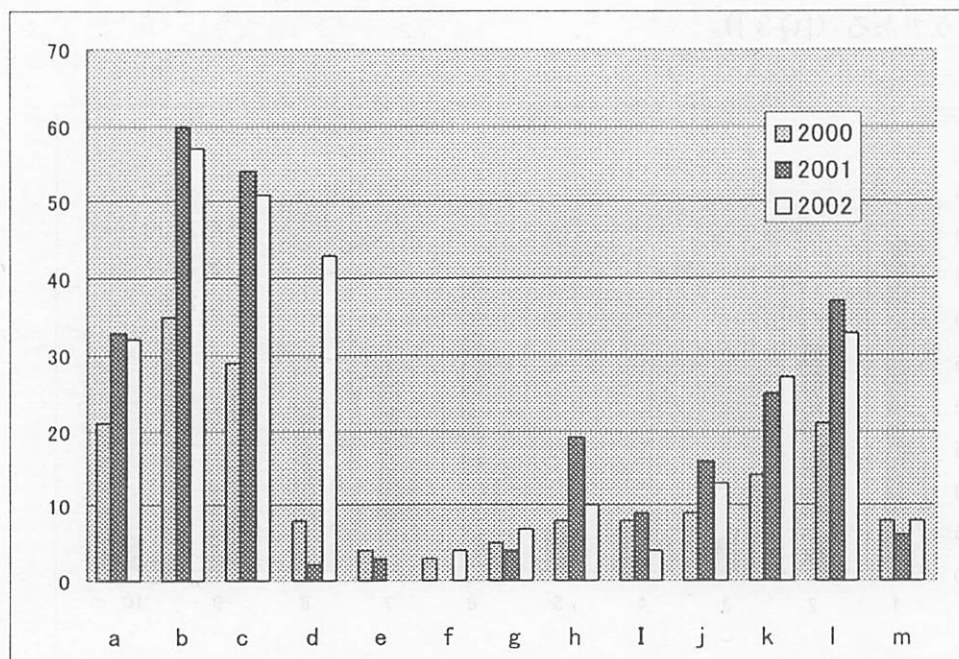


図3 志願時に重要と考えた評価のポイント

2.2 入学前教育について

AC入試は、11月までに合格者を決定することで、志願者に主体的な研究や活動のための時間を提供することができる。それはこの入試の一つの特徴でもある。そしてその趣旨のとおり、入学までの時間を利用して、学会発表（日本天文学会）をしたり、論文をまとめたりする者が当初からあった。また、3冊目の著書（プログラミングの解説書）を刊行した現役の高校生もいた。

一方、早期入試の拡大とともに、その合格者の入学までの学習に対して、大学が関与することを望む社会的な要請も大きくなった。

そこで、AC入試の合格者が、入学までにどのように学習しているのか、また、大学が課題を出すなど入学前の学習に関与することをどう思うか、尋ねてみた。

[Q6]

合格後、入学までにどのような学習をしていたか（自由記述）

回答には、「関心のある領域の読書や研究」（23名）、「英語」（20名）などが多く見られた。さらに「日本化学会提出用の論文制作（自然）」や「後輩の研究補助（生物資源）」、また「ネパールに行き現地NGOに参加（国際総合）」「作品制作を続け個展を開いた（芸術）」などの活動が挙げられた。「一か月間語学留学した（自然）」者もある。

これらの回答を寄せた者は、それぞれに有意義な時間を過ごすことができたと感じているようである。ある回答に曰く、「本当の意味で『勉強』していると感じた」、また別の回答に、「自分は学ぶということが好きなかもしれない、そう気づかされた時期になった」。

また、センター試験の勉強（20名）、一般入試のための勉強（11名）という回答も多かった。「高校の先生に、センター試験は受けろと言われていた」、また「早期合格者用のプログラムがあった」という進学校の出身者もいる。力を入れて取り組んだ教科としては、英語のほか、数学（8名）、物理（3名）、生物（2名）、化学（1名）が挙げられた。

[Q7]

合格後、入学までに大学から課題を出して学習させるべきだと思うか

「思う」 : 21名 (33%)

「思わない」 : 42名 (67%)

AC入試合格者の3分の2は、入学前に課題を出すことに賛成していない、という結果である。

図4に教育組織別の人数比を示す。(学類の略称は次の通り。日本語・日本文化：日日、生物資源：資源、国際総合：国際、社会工：社工、工学システム：工シス)

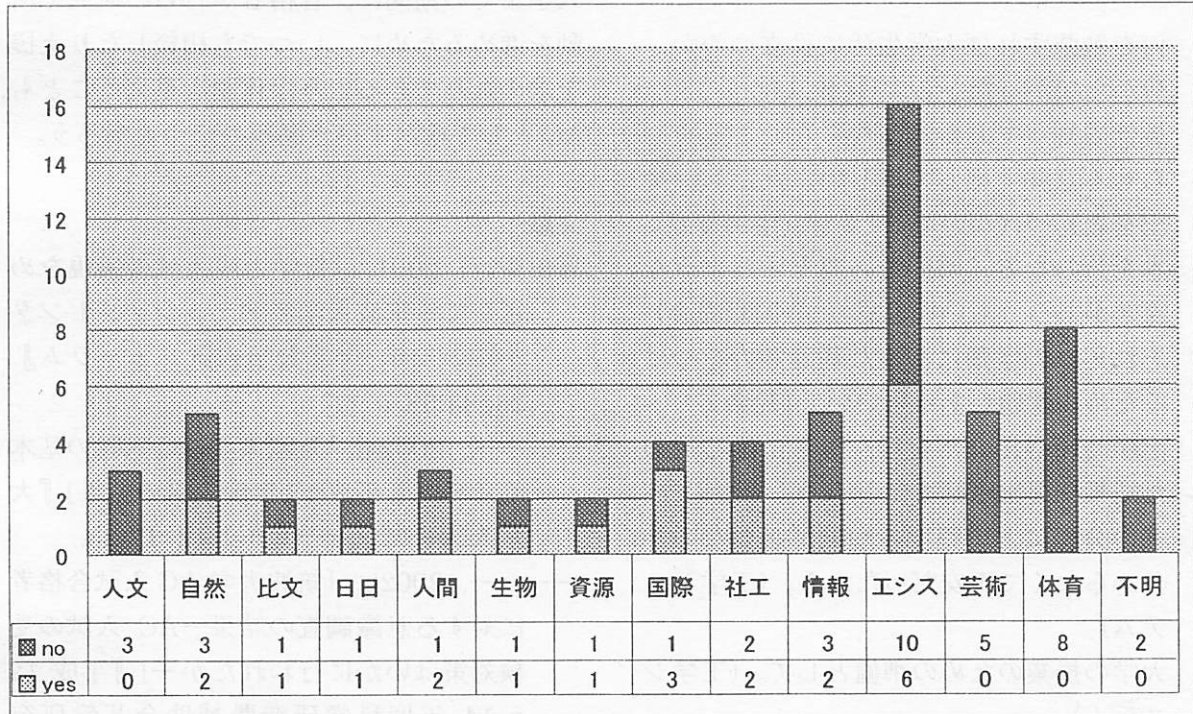


図4 入学前に大学から課題を出して学習させるべきか (所属教育組織別)

専門学群では「思う」と答えた者は皆無であった。また、数学・物理などに関連する科目の多い理工系の教育組織では、「思う」と回答する比率が高いと予想されたが、特にそのような傾向は見えていない。

入学前の課題は「必要ない」と答えた者がその理由としてあげるのは、「自己責任。自主性に任せるべきである」、「主体的な勉強を進めるための貴重な時間である」という2点に尽きる。「指図されなくても行動できる人がAC入試の合格者であるべきだ」というもっともな意見も多く聞かれた。過半数の合格者からこのような回答が得られるのは、ねらい

どおりの選抜ができていないことの反映であると考えられる。

また、これまでの合格者の中には、個別学力試験を受けなかったことを、入学後もコンプレックスに感じている者があった(島田2002a: 23)。彼らは、自分が合格に足る学力を備えていることを確信できないのである。もし入学前に大学から課題を課されれば、やはり自分は学力不足なので、それを補うよう指示されたのだ、と受け取ってしまうおそれもある。

アンケートの結果と併せて考えるに、AC入試の合格者に一律に課題を課すことには慎

重でなければならないだろう。

一方、「必要である」と答えた者には、「どうしても緊張感が緩むから」という理由をあげる者が多い(9名)。また、理工系の学生には「今、学力の不足を感じているから」と答える者もいる(3名)。

以下、「必要である」と答えた者が、それ以外に挙げた理由をいくつか紹介する。

- ・ 何を勉強すれば大学生生活に役立つのか、分からなかったから。(比較文化)
- ・ 最低限知っておかねばならないことを知らせる意味で出してほしい。ただし、提出を義務づけなくてほしい。(生物資源)
- ・ 本を読むなど、時間を必要とするような課題があってもいいと思う。(国際総合)
- ・ それぞれの学類にあった基礎学力をつけるための課題があるといい。(社会工)
- ・ 出願時に提出した資料をさらに推し進めた結果を提出させてはどうか。(情報)
- ・ どの分野にどの程度の知識が必要なのか分からなくて不安だったから。(工学システム)
- ・ 大学の授業のための準備として。(工学システム)

全体を通じて見ると、大学での学習が具体的にどのように進められるのか分からないのは不安である、入学前にどのような準備が必要なのか知っておきたい、そのために課題が「必要である」と感じる者が多いようである。

また、課題は「必要ない」と答えた者の中にも「入学後の学習内容について早く教えてほしい」「早めにシラバスを配ってほしい」などの意見を記した者があった。

AC入試の合格者には明確な目的意識をもつ者が多く、大学でその目的が実現できるかどうかに関心がある。これらの回答はそうした合格者の関心を反映するものと解釈される。

とすれば、合格者のモチベーションを維持し、大学での研究に向けた主体的な学習を促すためには、入学後のカリキュラムを早い時期に詳しく提示することも、有効な手段の一つかもしれない。

また、「専門の教官が合格者の一人ひとりに応じた課題を出し、添削などの指導をしてくれるなら歓迎したい」という回答もあった。入学までの期間に、合格者が自らの研究や活動を進めるために、いつでも相談したり支援を求めたりできるような体制を整えることも、ACとして検討すべき課題の一つであろう。

文献

島田康行, 2001, 「新学力観入試の実現をめざして—筑波大学アドミッションセンターこの一年—」『大学入試フォーラム』23: 33-38.

———, 2002a, 「筑波大学AC入試の基本的考え方と平成13年度入試の結果」『大学入試研究ジャーナル』12: 17-23.

———, 2002b, 「筑波大学AC入試合格者に対する意識調査の結果—AC入試の受験対策はいかに行われたか—」『平成12~14年度科学研究費補助金基盤研究(A)12301014「高校と大学のアーティキュレーションに寄与する新しい大学入試についての実践的研究」平成13年度中間報告書』: 117-24

附記

本研究は平成12~14年度日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究(A)(1)12301014「高校と大学のアーティキュレーションに寄与する新しい大学入試についての実践的研究」(研究代表者: 夏目達也)による成果の一部である。